



目次

センターからのお知らせ.....	2
新旧センター長からのご挨拶.....	2
日本人研究者ネットワークの紹介.....	4
センター活動報告	5
JSPS Abend を開催	5
日本人研究者ネットワーク(JR-Net)連絡会議を 開催	6
6th Cross-disciplinary Meeting of Japanese Young Scientists in Europe に参加.....	6
RUB JAPAN SCIENCE DAYS 2018 に参加	7
Joint workshop between Kyoto Univ. and Universität Wien に参加	7
Second Interdisciplinary and Research Alumni Symposium iJaDe2018 に参加	8
今後のイベント.....	8
ドイツ学術ニュース.....	9

【表紙写真: リンツ・アム・ライン (Linz am Rhein)】リンツ・アム・ラインはライン川沿いにあるドイツらしい小さな街で、観光地として知られています。夏に人気のライン川クルーズを利用すると、ボンから1時間半ほどで着きます。船上からの景色をゆったりと楽しみながら辿り着ける可愛い街をぜひ訪れてみてください。

センターからのお知らせ

新旧センター長からのご挨拶

退任のご挨拶ー小平 桂一 前センター長より

ボンでは異常に暑い日の続いた夏が過ぎて秋の気配が感じられるようになった。街路のカシヤプラタナスの木々も色づき始め、山アジサイの白かった花房がエンジ色を帯びている。日本では集中豪雨、地震・台風といった災害に次々に見舞われ、被災者の救済や復旧作業など課題山積のなか、まだまだ残暑が厳しいと伝えられている。環太平洋地殻活動帯の中緯度、ユーラシア大陸の東端に連なる火山列島・日本では、今までにもこうした夏を何度か迎えてきたことだろう。美しいが時として激しい自然との共生の中に、日本の心性は育まれてきた。そこに、叩かれ強く、お互いに助け合い、慎ましやかで、豊かな感性と美意識に恵まれた日本のヒトが居る。しかし、進展目覚ましい科学技術の恩恵に浴しきっていると、自然や人々と共に生きようとする志向が薄れがちになる。

ヨーロッパ大陸の大部分は、自然環境に比較的恵まれて、多くの民族が争いながらも交流し、文物の混淆のうちに歴史を積み上げてきた。

自己主張は当然であり、ヒトの生みだしたモノには責任を負わねばならない。そこに合理性と権利・責任に基礎を置くドイツ人気質の源を見るような気がする。日本を訪れたことのあるドイツ人の多くが、「日本に行くとホッとする」と言う。日頃から無意識に抱いている自己主張・自己責任の強迫観念から解放されて、くつろいだ気分になれるかららしい。何事も長所が短所であり、短所が長所でありうる。

科学技術の進歩と資本主義経済の熟成がリードするグローバル化時代に、「ヒトと自然」を基軸とする新たな文明の構築に向けてなら、日本が貢献できるのではないか。それには、どのようなヒトを育てればよいのだろうか。

これが、ボン・センターに10年間勤務して帰国を前にしての私の感慨である。



(小平 前センター長。JSPS Abend にて撮影)

小平 桂一



新任のご挨拶－林 正彦 新センター長より

本年 10 月 1 日より、小平桂一先生からボン研究連絡センター長を引き継ぐことになりました。

私の専門は小平先生と同じ、天文学です。これまで、「星や惑星系はどのように形成されるのか？」というテーマに興味を持って、さまざまな望遠鏡を使って研究してきました。しかし大学 4 年のときには、惑星ができていく様子を望遠鏡で実際に観測することなど、難しすぎて現実的には不可能だと考えていました。当時は、太陽以外の恒星周囲に惑星が存在するかどうかも知られていませんでした。しかし学問の発展というのはすごいもので、今や太陽以外の恒星周囲に何千個もの惑星が発見されています。そのような惑星が作られていく様子も観測できるようになりました。たぶん私が生きている間に、これらの惑星のいくつかに、原始的な生命が存在する証拠が発見されるのではないかと考えています。

1985 年ころだったと思いますが、大学院生のとき、ここボンにあるマックスプランク電波天文学研究所に 1 か月ほど滞在したことがあります。英語もまともに話せなかったころですから、いわんやドイツ語をや、というレベルだったのですが、そもそもドイツ語と英語は近い親戚関係にあるのだから、ドイツ人が英語を話せないはずがないと思っていたのが間違いでした。今回はその轍を踏まないようにと、あらかじめドイツ語の勉強を始めたのですが、ひととおりドイツ語で日常生活が送れるようになるまでには、先が長くなりそうだというのが実感です。



(林 新センター長。JSPS Abend にて撮影)

私は 35 歳のときから 51 歳まで、ハワイにある「すばる」望遠鏡の建設と運営に携わりました。望遠鏡のあるハワイ島には、12 年半にわたって住んでいました。息子ふたりにとってはハワイがふるさとです。もちろん、マウナケア山頂に行って、すばる望遠鏡を使って天体観測もしました。しかし、それは 1 年に 2 日か 3 日あれば良い方で、普段は海岸沿いのヒロ市内にあるオフィスで、日々観測所の運営に頭を悩ませていました。「これで仕事さえ無ければ、ほんとうにパラダイスなのになあ...」と思いながら。そんな経験から、日本国外で事業を展開することの難しさは、ひととおり経験してきたつもりでいますが、ここドイツではどんなことが待ち受けているのでしょうか。楽しみでもあり不安でもあります。

みなさま、どうぞよろしくお願いします。

林 正彦



日本人研究者ネットワークの紹介

在欧若手研究者ネットワーク世話人・志村聡美さん、ドイツ物理学・応用物理学セミナー代表・制野かおりさんからご寄稿いただきました。

在欧若手研究者ネットワーク

私達のネットワークはヨーロッパ在住の研究者を対象としており、主な活動は、Facebook ページを介した情報交換、「交流会」という名の研究発表会です。交流会では、土曜日と日曜日の2日間にわたり研究発表会と懇親会が開催されます。私達のネットワークの最大の特徴として分野横断型である点が挙げられますが、交流会では心理学者から理論物理学者まで、様々な分野の研究者が集まります。異分野の研究者に自分の研究内容を伝えるため、多くの参加者がわかりやすく、非常に面白い研究発表を行っており、新鮮な刺激を受けることができます。そのため、交流会を通して知り合った研究者がその後も連絡を取り合い、国境や専門分野を越えて親睦を深めるケースが多く見受けられます。交流会がきっかけで始まった共同研究もあります。また、帰国した本ネットワークの世話人が同窓会を開催しており、日本でも世代や分野を超えた研究者の交流を推進しております。ご興味のある方は世話人までご連絡ください。

在欧若手研究者ネットワーク世話人・志村聡美さん



(上) 研究発表会の様子 (下) 懇親会の様子

ドイツ物理学・応用物理学セミナー

日本で博士号取得後にポスドクとしてドイツの大学で働いた最初の約2年間は、同じ街の日本人の方やドイツ国内にいる研究者の方と知り会わずに過ごしました。ドイツで研究活動が続けていくうちに、在独日本人の研究者の方々と接することが良い刺激になると感じ始め、さらにはドイツ国内の物理学研究者がそれなりの数であると思い始め「ドイツ物理学・応用物理学セミナー」を立ち上げました。2015年10月に第1回セミナーをベルリンで開催し、これまで3回のセミナーを開催してきました。活動の詳細はJSPS ボン研究連絡センターHP内の日本人研究者ネットワークからのリンクを参照ください。写真は今年6月にミュンヘンで開催をした第3回ドイツ物理学・応用物理学セミナーのものです。今まで開催しましたセミナーは、(公社)応用物理学学会の応用物理学学術・教育奨励基金より支援を受けて実施されました。心より感謝申し上げます。

ドイツ物理学・応用物理学セミナー実行委員会代表
制野かおりさん



(上) 集合写真 (下) 研究発表会の様子

センター活動報告

JSPS Abend を開催

日時：2018 年 9 月 24 日（月）

場所：Centro Hotel Bristol Bonn（ボン）

9 月 24 日、ボン研究連絡センターは、ドイツにおける本会対応機関、および日独の学術関係者 80 名超を招待し、年次活動報告会“JSPS Abend”を開催しました。本年 4 月に着任した本会里見理事長による歓迎の挨拶に続き、ドイツ学術交流会（DAAD）リューランド（Dorothea Rüland）事務総長、在ドイツ日本国大使館八木特命全権大使、アレクサンダー・フォン・フンボルト財団（AvH）アウフデアハイデ（Enno Aufderheide）事務総長からご挨拶をいただき、ボン大学ホッホ（Michael Hoch）学長の乾杯のご発声により開会しました。参加者はピアノの演奏を楽しみながら親睦を深めるとともに、マックス・プランク固体研究所の高木所長によるレクチャー“Sociology of interacting electrons”に興味深く耳を傾けていました。また本年の JSPS Abend では、9 月末で 10 年超の任期を終え退任する小平センター長に対し、長年の学術への貢献と日独交流の功績を称え、DAAD から DAAD-Ehrenmedaille が、AvH から Werner Heisenberg-Medaille が授与されるとともに、ドイツ研究振興協会（DFG）、ドイツ語圏日本学術振興会研究者同窓会（JSPS Club）から感謝の言葉が贈られました。最後に、小平センター長によるお別れの挨拶、ならびに林新センター長の挨拶をもって、盛況のうちに閉会しました。



（左）八木大使



（右）ホッホ学長



（左から）リューランド事務総長、小平センター長



（左）DAAD による DAAD-Ehrenmedaille



（右）AvH による Werner Heisenberg-Medaille



（左から）アウフデアハイデ事務総長、小平センター長



（左）里見理事長



（右）高木所長



講演に聞き入る参加者の様子

日本人研究者ネットワーク(JR-Net)連絡会議を開催

日時：2018年9月24日（月）

場所：Centro Hotel Bristol Bonn（ボン）

参加者：小平センター長、林先生、出口副センター長

ボン研究連絡センターでは2014年からドイツで研究する日本人研究者の意見交換の場として、日本人研究者ネットワーク（JR-Net）連絡会議を開催しています。今年もドイツ語圏の大学、研究機関で活躍している日本人研究者4名と、在欧日本人研究者ネットワークの世話人2名を招き、本会からは東京本部の里見理事長及び青山国際企画課主任、ボン研究連絡センターからは小平センター長、林次期センター長及び出口副センター長が出席して意見交換を行いました。

会議では、在欧日本人研究者ネットワークの活動状況について各世話人から説明があり、本会からは各種国際交流事業や、海外特別研究員制度などの日本人研究者を諸外国に派遣する事業及び外国人研究者招へい事業、科学研究費補助金の「国際共同研究加速基金（帰国発展研究）」等について説明を行うとともに、ボン研究連絡センターからは、今年度から新たに開始した在欧日本人若手研究者交流会の年会への会場費支援等、センターでの取り組みについて報告を行いました。

た。会議後半では、シニア研究者への支援としてはどのようなものが考えられるか、ドイツ語圏日本学術振興会研究者同窓会とどのような連携ができるか等、今後のネットワークの強化に向けて種々議論が交わされました。



（上）会議の様子



（左）里見理事長

6th Cross-disciplinary Meeting of Japanese Young Scientists in Europe に参加

日時：2018年8月4日（土）～8月5日（日）

場所：Fleming's Express Hotel Frankfurt（フランクフルト）

参加者：小平センター長、出口副センター長

6th Cross-disciplinary Meeting of Japanese Young Scientists in Europe が8月4日から5日にかけてフランクフルトで開催され、ボン研究連絡センターから小平センター長及び出口副センター長が参加しました。本イベントは、ドイツをはじめヨーロッパ各地に滞在する研究者による分野横断的なミーティングとして毎年夏に開催されており、ドイツだけではなくスイス、フランス、英国、イタリア、オランダなどから合計35名の若手研究者が参加しました。

研究分野別に1日目に3セッション、2日目に2セッションが設けてあり、参加した若手研究者が自身の自己紹介から始まり、研究内容について1名10分ずつ順番に紹介していく形式で行われました。1日目には小平センター長が「私の天文学」と題した講演を、2日目には出口副センター長が「JSPS ボン研究



講演の様子

連絡センター在独日本人研究者支援及びJSPS国際交流事業」と題したプレゼンテーションを行いました。過去に何度か参加経験のある若手研究者から今回初めて参加した若手研究者まで様々でしたが、コーヒーブレイクや1日目終了後の夕食会では活発な議論や情報交換が行われました。

ボン研究連絡センターからのサポートとして、今回初めて会場費の一部支援を行いました。過去には研究内容の発表を通じて国際共著論文に繋がったという実績もあり、今後の交流活動やネットワークの更なる強化が期待されます。

RUB JAPAN SCIENCE DAYS 2018 に参加

日時：2018 年 7 月 5 日（木）

場所：ルール大学ボーフム（Ruhr-Universität Bochum）

参加者：出口副センター長、Schulze 現地職員、菊池国際協力員

RUB JAPAN SCIENCE DAYS 2018 が 7 月 5 日から 7 日にかけてルール大学ボーフムで開催され、ボン研究連絡センタースタッフは 3 日間のプログラムのうち 1 日目に参加しました。本イベントは、ルール大学ボーフムと日本の大学との関係強化を目的として行われ、日本側からは東京大学、大阪大学、筑波大学が参加しました。今回のテーマは「Society 5.0 – Chances and Risks of Digital Transformation and the Responsibility of Universities」と題され、デジタルトランスフォーメーションが社会におよぼす成果や今後の課題について、様々な観点から講演やディスカッション、ワークショップが行われました。

1 日目の午後に、ルール大学ボーフム学長の挨拶により開会し、前内閣府総合科学技術・イノベーション会議議員の原山優子氏による Society 5.0 に関する基調講演に続いて、日独双方の研究者によるレクチャー、その後パネルディスカッションが行われました。講演会場に隣接する部屋には各機関のデスクが設けられ、講演の合間に行われた Institutional and Funding Fair では、立ち寄った学生や教職員へ資料を提供するとともに本会事業の紹介を行いました。日本側からは、大阪大学、筑波大学、科学技術振興機構（JST）、ケルン日本文化会館などのデスクが設置されていました。



（左）JSPS のデスク（右）講演会場

ルール大学ボーフムの紹介



（上）Audimax と呼ばれる建物

<https://uni.ruhr-uni-bochum.de/en/facts-and-figures>
(7 月 11 日閲覧)

ルール大学ボーフム（Ruhr-Universität Bochum）は、ノルトライン＝ヴェストファーレン州ボーフムにある州立大学です。ルール工業地帯にあり、労働者階級の人々が高等教育にアクセスできるよう、1962 年に設立されました。20 の学部、約 80 の学科をもつ総合大学で、学生数は 43,015 人と多く、ノルトライン＝ヴェストファーレン州では 3 番目の規模を誇っています。

ボーフム中央駅から地下鉄（U-bahn）に 10 分ほど乗り、Ruhr-Universität 駅で降りると、目の前には 4.5km 四方の広大なキャンパスが広がっています。キャンパス内はとても広々としており、周囲は緑に囲まれています。キャンパスの中心にある、コンサートや式典のためのホールを備えた Audimax と呼ばれる特徴的な建物が印象的です。

Joint workshop between Kyoto Univ. and Universität Wien に参加

日時：2018 年 9 月 6 日（木）

場所：ウィーン大学（Universität Wien）

参加者：出口副センター長

京都大学とウィーン大学により、現在及び将来の連携をテーマにしたジョイントワークショップがウィーン大学で開催され、そのオープニングセッション及びラウンドテーブルに出口副センター長が参加しました。

研究・国際担当副学長 Prof. Dr. Jean-Robert Tyran による歓迎の挨拶では、京都大学はウィーン大学にとって戦略的なパ

ートナーであり、当日午後と翌日に開催の両大学の教員らによる分野別のセッションで、更に今後の連携が深まることへの期待が述べられました。次いで小井沼在オーストリア特命全権大使から、来年迎える「日本オーストリア国交樹立 150 周年」において、両大学による学術分野の事業が行われることを期待する旨挨拶がありました。

引き続いてのラウンドテーブルでは、オーストリア研究推進機構及びオーストリア科学財団の各担当者及び出口副センター長により、日本とオーストリアの間の交流プログラムや共同研究プログラムについての説明があり、次いでウィーン大学国際部によるプログラム等紹介の後、活発な質疑応答が行われました。

Second Interdisciplinary and Research Alumni

Symposium iJaDe2018 に参加

日時：2018 年 9 月 5 日（水）

場所：神戸大学六甲台キャンパス（神戸）

参加者：大阪大学 切畑職員（2017 年度国際協力員）

9 月 5 日（水）に、神戸大学において行われた iJaDe2018 に参加しました。このシンポジウムは、ドレスデン工科大学、神戸大学、京都大学、大阪大学の共同で開催されました。5 日のシンポジウムは、神戸大学発達科学部人間発達環境研究科の建物内で、複数のテーマごとに別れてのワークショップ形式で進められました。International Affairs がテーマのワークショップに参加し、本会の外国人特別研究員事業をはじめとする国際交流事業の紹介を行いました。

当日は、前日に起きた台風 21 号の影響により、交通機関に乱れがあり、遅れてくる参加者も多くいましたが、最終的に、15 名の大学関係者が参加しました。ドイツ側の参加者は、研究助成に関するエクセレンス戦略やドレスデン工科大学の国際交流プログラムについて発表し、日本側の参加者は、交換留学の際に使用できる奨学金や、国際交流に関するプログラムについて発表しました。

意見交換や質疑応答が活発に行われ、少人数のワークショップであったため、参加者間の親睦が深まりました。シンポジウムを通して、日独間の学術交流や、学生交流のための奨学金やプログラムの詳細についての知識が深まり、相互理解が進みました。

今後のイベント

10 月 5 日（金）～6 日（土） 会員による会員の招待（MIMe）（ボン）

10 月 6 日（土） 第 6 回ジュニアフォーラム（ボン）

11 月 22 日（木）～23 日（金） JANET-FORUM 2018（フランス・リヨン）

2 月 7 日（木）～8 日（金） 第 15 回日独学術コロキウム（ベルリン）



（上）船上からのライン川。猛暑で雨が降らず、水位が 1.14m も低下したため、大型船の運航休止など、水運にも影響が出ました。

初めてのドイツの夏は猛暑に苦しんだ日々でした。この夏の異常な暑さにより、ヨーロッパ各地で気温が 40℃近くまで上がり、山火事等も数多く報道されていました。

ボンも例外なく、1 番暑い日は 39 度まで気温が上がり、夕方になっても 30 度以上の日が数週間続く日々……しかも、ドイツのほとんどの家庭にはエアコンがありません。ドイツに来て、眠れないほどの暑さで毎日ぐったりするとは夢にも思っていませんでした。

そして、この暑さは突然、秋の空気を迎え、終わりを告げます。2、3 日にして肌寒くなり、2 週間ほど経つと日本の 10 月のような気温にまで一気に冷え込みました。急な季節の移り変わりにとても驚いています。

菊池 国際協力員

ドイツ学術ニュース

ドイツ研究振興協会（DFG: Deutsche Forschungsgemeinschaft）が年間レポートを発表

DFG は、2017 年に年間で、約 32,500 件の研究プロジェクトに対して総額約 32 億ユーロを助成した。前年と比較して、研究プロジェクトの数は約 1,000 件、助成額は 1 億 2,000 万ユーロ増加した。これらの研究プロジェクトのうち 8,000 件以上は新規採択されたものであり、合計 21 億ユーロが助成された。これらの統計は、2018 年 7 月 4 日に DFG 年次総会とあわせてボンで開催された会員総会において提出された年間レポートによるものである。

2017 年の DFG の活動（注目すべき結果と数値）

DFG は、2017 年に合計 3 万 2,481 件の研究プロジェクトを助成した。その助成額の総額は 31 億 5,000 万ユーロであり、67.9%が連邦政府、31.2%が州政府によるものであった。新規採択の件数が 2016 年の 7,933 件から 8,303 件に増加するとともに、その助成額も 2016 年の 20 億 5,000 万ユーロから 21 億 3,000 万ユーロに増加した。

2017 年において、助成された研究プロジェクトの半数以上、すなわち 1 万 6,517 件が個別助成プログラムであった。これらの研究プロジェクトに対する助成額の総額は約 11 億ユーロであり、2016 年と比較すると、8,500 万ユーロ以上の増加となった。リサーチ・トレーニング・グループなどの共同研究プログラムで助成されているグループは 840 あり、それらのグループによるプロジェクト件数は約 1 万 3,760 件、それに対する助成額は合計で約 13 億 3,000 万ユーロであった。エクセレンス・イニシアティブのプロジェクト件数は 99 件であり、その助成額は 4 億 3,830 万ユーロであった。

分野別の助成額構成をみると、2017 年は生命科学分野が約 11 億ユーロ（総額の 35.2%）と最も多くの助成金を獲得し、それに続いて、自然科学分野の約 7 億 1,400 万ユーロ（総額の 22.6%）、工学分野の約 6 億 2,400 ユーロ（総額の 19.8%）、人文社会科学分野の約 4 億 8,000 万ユーロ

（総額の 15.2%）となった。分野横断的なプロジェクトへの助成額は約 2 億 2,400 万ユーロ（総額の 7.1%）であった。

採択されたプロジェクトの分野は、考古学、免疫学、動物学、農学、植物科学、材料科学、土木工学、生物学、教育学、分子化学、数学、力学、社会人類学、統計物理学、システム工学など多岐にわたる。

本レポートは書籍としても刊行され、上記の内容以外の統計に加えて、DFG の助成活動の焦点となる領域、研究システムや科学政策に関する問題への DFG の取り組みについても説明している。

本レポートには、代表的な研究プロジェクトに関する報道記事も含まれる。DFG のシュトロシュナイダー（Peter Strohschneider）理事長とツヴォニク（Dorothee Dzwonnek）事務総長は本レポート冒頭で次のように述べている。

「本レポートにおける国際的な焦点は次の 2 点を考慮している。1 点は、グローバルな対話と協力が科学研究に大きな恩恵をもたらすこと、もう 1 点は、世界のある一定の地域では、研究テーマと方法を自由に選択することがより難しくなっているという事実である。研究テーマと方法の自由、政治的・経済的・社会的な要求からの独立を志向した研究資金はますます重要になっている。」

DFG:

http://www.dfg.de/service/presse/pressemitteilungen/2018/pressemitteilung_nr_24/index.html

（2018 年 7 月 4 日）

ドイツ学術ニュースについて

本センターHP では、ドイツ学術ニュースを定期的に更新しています！

最新のニュースや過去の記事の詳細については、こちらをご覧ください。

<https://www.jsps-bonn.de/ja/german-science-news/>

ドイツ研究振興協会（DFG）が「DFG Funding Atlas 2018」を発表

ヨーロッパにおけるドイツと英国の形成的役割 / 持続可能性の高いドイツの研究助成システム / 依然として高い第三者資金の割合—基本的資金の新たな動向

ドイツの大学や研究機関は、欧州研究領域においてどのような役割を果たしているのか。外国人研究者にとってドイツという研究の場はどれほど魅力的なのか。どの機関がどのくらいの第三者からの研究資金を獲得しているのか。大小様々な規模の大学や研究分野、また基本的資金と第三者資金との間で、ドイツの研究助成システムの割合はどのようにになっているか。以上を含む様々なトピックについての包括的な図やデータ、グラフが「DFG Funding Atlas 2018」には掲載されている。「DFG Funding Atlas 2018」は 2018 年 7 月 5 日（木）、ドイツ大学長会議（HRK: Hochschulrektorenkonferenz）、ドイツ学術財団連盟とともに DFG によって公表された。

「DFG Funding Atlas 2018」は報告書の第 8 版であり、ドイツ最大の研究助成機関である DFG が、公的資金の提供を受けた研究についての重要な統計を、1997 年以来 3 年ごとに発行している。使用された数値およびデータ材料の手法は継続的に拡張され、主題や質問項目も考慮されている。本号における包括的概要は、2014 年から 2016 年のドイツならびに EU 主要公的研究資金提供機関からの何万ものデータに基づいている。

「DFG Funding Atlas 2018」は EU における研究資金調達に重点を置いている。一連の評価によって、とりわけドイツと英国の 2 か国が欧州研究領域を形成していることが示されている。例えば、2014 年から 2016 年にかけて、研究とイノベーションのための EU 枠組みプログラム「Horizon 2020」の大部分をドイツ（39 億ユーロ）が占めており、英国（36 億ユーロ）が続いた。独英両国とも、フランス（24 億ユーロ）、スペイン（21 億ユーロ）、イタリア（19 億ユーロ）を大きく上回った。また、独英両国は「Horizon 2020」の下での二国間協力と EU 全体にわたるネットワークにおいても、他国を大きく上回った。欧州研

究会議（ERC）からの資金提供を受けて、英国は 555 件の ERC 若手助成金（Starting Grant）、ERC 独立移行助成金（Consolidator Grant）、ERC 上級助成金（Advanced Grant）が採択されており、ドイツは 456 件採択されている。科学における国際的モビリティに関する更なる分析により、様々な地域や研究分野における多くの外国人研究者にとって、ドイツは非常に魅力的であることが示されている。多くの外国人研究者は、米国、中国、インド、ロシアからドイツにきている。DFG が資金を提供するリサーチ・トレーニング・グループや共同研究センター、また特に、連邦政府と州政府によるエクセレンス・イニシアティブの枠組みの大学院やエクセレンス・クラスターは、国際的魅力を高めることに大きく寄与している。前者の外国人スタッフの割合は 15%、後者は 28%にのぼる。

「DFG Funding Atlas 2018」では、大学全体の財源における第三者資金の役割や、第三者資金と州の基本的資金との関係に関する、科学政策の観点からも重要な発展について示されている。第三者による資金提供の割合は 2012 年に 28.1%と上昇したが、それ以降、長期間安定している。第三者資金における 1 年あたりの伸び率は、2008 年～2013 年の平均 9%から 2015 年には 1.5%に大幅に低下した。対照的に、基本的資金の 1 年あたりの伸び率は、2008 年以降、平均 4.4%であったが、2014 年に初めて、第三者資金より高い割合となった。DFG のシュトロシュナイダー理事長は「大学への第三者資金調達圧力は依然として強いが、現在はそれ以上のものはない。一方、基本的資金には新たな動向が見られる。」と述べた。合計で、ドイツの大学は、2015 年の調査年に、約 200 億ユーロの基本的資金、74 億ユーロの第三者資金を獲得した。第三者資金提供元では、DFG は全体の 33.1%と依然として最大であり、連邦政府はこれまで大幅なシェアを占めていたものの 25.2%と微減し、EU は 9.7%となった。産業界や経済界からの第三者資金はわずか 19%であり、引き続き減少傾向にある。

DFG:

http://www.dfg.de/service/presse/pressemitteilungen/2018/pressemitteilung_nr_28/index.html

（2018 年 7 月 5 日）



ドイツは研究において国際的に非常に魅力的な場所

留学生と外国人研究者の人数は増加 / アンヤ・カリチェック (Anja Karliczek) 大臣「研究の自由と大学への投資が効果を上げている」

ドイツは、外国の学生や研究者にとって魅力的な場所である。同時に、外国で学ぶドイツ人学生の人数も再び高水準に達している。これは、ドイツ連邦教育研究省 (BMBF: Bundesministeriums für Bildung und Forschung) が、ドイツ学術交流会 (DAAD: Deutschen Akademischen Austauschdienst)、ドイツ高等教育科学研究センター (DZHW: Deutsche Zentrum für Hochschul- und Wissenschaftsforschung) とともに発表した「サイエンス・コスモポリタン 2018」の報告書に示されている。

BMBF のカリチェック大臣は「ドイツは国際的に非常に魅力的な研究場所であり、国際交流の恩恵を受けている。ドイツ国内で合意した留学生 35 万人以上という目標は、予想以上に早く達成された。研究の自由と高等教育への投資がこれまで以上に効果を上げている。ドイツの研究と高等教育のシステムは国際的にネットワーク化されており、様々な障壁にも関わらず、文字通りコスモポリタンである。」と述べた。ドイツの大学における留学生数は 2017 年に 5% 増加し、35 万 9 千人となった。2013 年に連邦政府と州政府が設定した目標は 2020 年までにドイツへの留学生を 35 万人に増やすというものであったが、すでに 2017 年に達成された。

また、研究者にとってもドイツには大きな魅力がある。2007 年以降、ドイツの大学における外国人研究者数は 84% 増加した。2016 年には、ドイツの大学における外国人研究者数は 4 万 6 千人となり、前年と比べて 6% 増加した。BMBF のカリチェック大臣は「ドイツの教育と研究における努力は実を結んでいる。エクセレンス戦略や科学技術協定、テニユア・トラック・プログラム等の国家的イニシアティブ、または革新的大学プログラムにより、ドイツは研究場所としての魅力をさらに高めている。」と述べた。

DAAD のヴァンターマンテル会長 (Margret Wintermantel) は、次のように述べた。

「留学しているドイツ人学生数は一貫して高いレベルにある。若者が外国で学ぶという貴重な経験を得ることをあきらめてはならない。慣れ親しんだ環境から遠く離れた場所で自分の道を見出すために学ぶことは、新しい知識の獲得だけでなく人格形成にも貢献する。私たちは、将来ドイツの大学の全学生の半数が学問的目的のための留学を経験することを目標としている。国際高等教育マーケティング・コンソーシアムである GATE-Germany とともに、DAAD は『study worldwide - EXPERIENCE IT!』や『Study in Germany - Land of Ideas』等のキャンペーンを通じて、関心のある学生や若手研究者への支援に取り組んでいる。」

DZHW のユングバウアー - ガンス会長は、次のように述べた。「ほとんどの外国人研究者は数学と工学分野で活躍している。博士学位取得者では、中国人研究者が 800 人近くとその根幹をなしており、それに続くインド、イタリアはそれぞれ約 300 人である。規模の大きな大学以外の研究組織に目を向けると、マックス・プランク協会は外国人研究者の割合が 46% と最大のシェアを誇っている。」

米国、英国などの他の魅力的な留学先と比べて、ドイツは多くの国からの外国人研究者や留学生を受け入れているのが特徴である。同時に、ドイツ人の学生および研究者は、様々な国を活動の場としている。DAAD 奨学金、連邦奨学金法

(Bafög) による留学支援、EU のエラスムス・プログラムなどはドイツ人学生に非常に人気がある。ポローニャ・プロセス開始以降、エラスムス・プログラムによるドイツの大学への受入人数はほぼ 3 倍に達した。

しかし、外国人留学生の退学率について、「サイエンス・コスモポリタン 2018」は何らかの対策が必要であるとしている。留学生のうち、学部生の 45%、修士課程学生の 29% が途中退学している。対照的に、ドイツ人学生の退学率は、学部生 28%、修士課程学生 19% である。BMBF から資金提供を受け、大学や他のパートナーと協力して、DAAD は学問的成功を確保するための対策の勧告を作成している。「学問的成功と留学生の退学」という 4 年間の研究プロジェクトは、すでにフィールド段階にある。

DAAD:

<https://www.daad.de/presse/pressemitteilungen/de/65451-wissenschaftsstandort-deutschland-international-hochattraktiv/>

(2018 年 7 月 17 日)

DEAL プロジェクトとエルゼビア社の交渉：学術コミュニティにとって受け入れがたいエルゼビア社からの要求

DEAL プロジェクト運営委員会の交渉代表者である、ドイツ大学長会議（HRK）のヒップラー（Horst Hippler）会長は、直近の交渉が今週開催されたボンで、次のように述べた。

「エルゼビア社から提示された過度な要求により、ドイツ学術機関連盟によって設立された DEAL プロジェクトは、エルゼビア社との交渉を一時中断せざるを得ない。

私たちとしては、三大学術出版社との交渉の目的は、学術論文のパブリッシュ＆リードに関する未来志向のモデルを開発することである。私たちは、現状、図書館にとって悲惨となる可能性のある学術雑誌の価格傾向に終止符を打ちたいと考えている。また、公的資金により支援を受けた研究成果へ、原則自由にアクセスできるようにするため、オープンアクセスの促進にも取り組んでいる。三大学術出版社は、これを達成するために重要な役割を果たすべきである。私たちは、持続可能なパブリッシュ＆リードのモデル、すなわち出版物への公正な支払いと、読者の無制限な購読の実現を目指している。しかしながら、エルゼビア社は、オープンアクセス原則に沿った学術コミュニティのニーズに対応し、財政的に持続可能な、ドイツ全国規模での取引を提供する意思はまだない。」

何か月にもわたり、ドイツ全国規模でのパブリッシュ＆リードのライセンス実現に取り組んでいる交渉は、世界中で多くの注目を

集めている。2017 年 10 月以来、DEAL プロジェクト交渉への連帯を示す方法として、多くの著名な研究者がエルゼビア社の編集者を辞任した。さらに、2016 年から 2017 年にかけて、およそ 200 の学術機関がエルゼビア社とのライセンス契約の打ち切りを選択した。エルゼビア社は、失った収入の少なくとも一部を確保するため、これらの学術機関との契約を継続するための議論開始を希望した。

ヒップラー会長は「将来のパブリッシュ＆リード契約の枠組み条件に関するエルゼビア社との基本合意が実現するのであれば、ドイツ学術機関にとって 2018 年後半の暫定的な解決策を模索することに価値がある。しかし、これまでにそのような兆候は全くない。」と述べた。

DEAL プロジェクトは、まだ冷静に未来を見据えている。エルゼビア社との契約を終了した学術機関のアクセスを同社が遮断する場合に備え、DEAL プロジェクトは必要な予防策を講じた。また同プロジェクトは、学術機関に対し随時進捗状況を共有していく。

HRK:

<https://www.hrk.de/press/press-releases/press-release/meldung/deal-and-elsevier-negotiations-elsevier-demands-unacceptable-for-the-academic-community-4409/>

（2018 年 7 月 5 日）

2017 年度連邦奨学金（BAföG）の統計：奨学金額は増加、奨学生数は減少

アンヤ・カリチェック大臣「より多くの世帯が、BAföG による支援の恩恵を受けるべき」

8 月 2 日に連邦統計局が発表した 2017 年度の BAföG の統計によると、奨学金の平均月額額は大幅に増加している。

BAföG の支援を受けている大学生は、1 月あたり平均 499 ユーロを受給した（前年比 35 ユーロ増、7.5%の増額）。また高校生や専門学校生は、1 月あたり平均 456 ユーロを受給した（前年比 21 ユーロ増、約 5%の増額）。

2016 年度に比べ、BAföG を受給する奨学生数は 5%減少している。この減少は、景気の安定と良好な経済状況が持続している結果であると説明できるだろう。高い就業率と所得の上昇により、より多くの世帯が自費で子に良い教育を受けさせることができるようになった。2017 年は、15 年ぶりに BAföG を受給する奨学生数の合計が 80 万人を下回った。

この新しい統計について、ドイツ連邦教育研究省（BMBF）のカリチェック大臣は、次のように述べた。

「約 290 万人の若者が、ドイツ国内で学んでいる。もし BAföG に頼らざるを得ない大学生の数がさらに減少したとしても、ドイツにおける教育の機会均等という BAföG の重要な役割が失われるわけではない。

極端な自己犠牲によって子の教育費を捻出せざるを得ない世帯を、教育支援により救済するべきである。私は、より多くの世帯が国家による教育支援の恩恵を受けることを願っている。可能な限り多くの若者が良い教育を受けることこそが、私たちの社会全体の利益となる。政権の連立協定においては、政策期間中に、BAföG へ 10 億ユーロを追加提供することが確約されている。私はこの資金を BAföG 改革に活用し、さらに多くの世帯が BAföG の恩恵を受けられるようにしていきたい。来年の新学期（2019~2020 年度の冬学期）までに発効する法案を提出する予定である。」

BMBF : <https://www.bmbf.de/de/bafogeg-statistik-2017-mehr-leistungen-weniger-empfaenger-6684.html>

（2018 年 8 月 2 日）

ドイツ研究振興協会（DFG）、ピーター・ショルツ （Peter Scholze）教授のフィールズ賞受賞を祝福

2016 年ライプニッツ賞受賞者が世界で最も権威のある 数学賞を受賞

DFG は、ボン大学数学研究所の教授、かつマックス・プランク数学研究所の所長であるショルツ教授が 2018 年フィールズ賞を受賞したことを祝福した。DFG のシュトロシュナイダー理事長は、次のように述べた。

「ショルツ教授は、2016 年にライプニッツ賞を受賞した優れた研究者であり、かつエクセレンス・イニシアティブを通じ資金提供しているエクセレンス・クラスターに所属している。ショルツ教授に代わって、私たちは受賞を嬉しく思う。今回の受賞は、ドイツの大学における研究環境が、新しいアイデアを追求し、才能を伸ばす優れた機会を提供し続けているという事実の、重要な裏付けとなっている。」

国際数学連合（IMU: The International Mathematical Union）は、8 月 1 日にリオデジャネイロで開催された国際数学者会議で、数論的代数幾何学へ根源的な貢献を行ったとして、ショルツ教授にフィールズ賞を授与した。

ショルツ教授は、2016 年に DFG のライプニッツ賞を受賞した。また、DFG が資金提供するボン所在のエクセレンス・クラスター、ハウスドルフ数学研究所の研究者であり、かつマインツ、デュイスブルク＝エッセン、ボンにおける特別研究領域プログラム（SFB: Sonderforschungsbereiche）の「周期、モジュライ空間および代数多様性の数理」のプロジェクトリーダーでもある。ショルツ教授は、同じくライプニッツ賞を受賞したゲルト・ファルティンクス（Gerd Faltings）に次ぐ、ドイツ人で 2 人目のフィールズ賞受賞者となる。フィールズ賞は、数学への傑出した貢献を称

えて、4 年に 1 度、国際数学者会議において最大 4 名に授与される。同賞は、さらなるトップレベルの数学的研究への動機付けを目的としている。

ドイツにおける最も重要な研究賞であるライプニッツ賞を、ショルツ教授は 27 歳で受賞し、同賞の 30 年以上の歴史の中で最年少の受賞者となった。その時点で、すでにショルツ教授は世界の主要な数学者の 1 人であり、20 年に 1 度しか現れないような特別な才能の持ち主であると考えられていた。選考委員会は、ショルツ教授が若年にもかかわらず、何十年も未解決のままであった数論的代数幾何学の根本的問題にすでに答えていたという事実を認識した。これは、いわゆる p 進局所ラングランズ予想を証明したことが特に当てはまる。2016 年には、ショルツ教授のいわゆるパーフェクトイド空間の理論によって、数学的手法の範囲を劇的に拡大したことが知られている。

ショルツ教授はボンで数学を学び、2012 年に 24 歳で博士号を取得した。同年、国際的に権威のあるハウスドルフ数学研究所の職（5 名のうち 1 名）に任命された。ショルツ教授はドイツ最年少で W3 教授職に就いた。また、多くの重要な数学賞を受賞し、いくつかのドイツ科学アカデミーのメンバーを務めている。2018 年 7 月には、ボンのマックス・プランク数学研究所の所長に任命された。

ショルツ教授に加えて、ケンブリッジ大学のコーチェル・ビルカー（Caucher Birkar）氏、チューリッヒ工科大学のアレッシオ・フィガリ（Alessio Figalli）氏、スタンフォード大学のアクシェイ・ヴェンカテシュ（Akshay Venkatesh）氏に、フィールズ賞がリオデジャネイロで授与された。

DFG:

http://www.dfg.de/en/service/press/press_releases/2018/press_release_no_35/index.html

（2018 年 8 月 1 日）

2018 年ソフィア・コワレフスカヤ賞授与

6 名の国際研究者は最大 165 万ユーロを受け取り、ベルリン、ボーフム、フライブルク、ハイデルベルグ、ザールブリュッケン、ヴュルツブルクにおいて自身の研究グループを組織しそれぞれ研究を進める予定である。

フンボルト財団（AvH: Alexander von Humboldt）は、ドイツにおける最も重要な研究賞の 1 つであるソフィア・コワレフスカヤ賞に、31 歳から 36 歳までの 6 名の国際的な研究者を選定した。受賞者にはそれぞれ最大 165 万ユーロが贈られる。

ソフィア・コワレフスカヤ賞を受賞した若手研究者には、キャリアの初期段階で革新的なプロジェクトを行うためのリスク資本が与えられる。本賞により、受賞者はドイツの大学または研究機関で最大 5 年間の研究を行い、受入機関で独自の研究グループをつくるのが可能になる。本賞は、連邦教育研究省（BMBF）の資金提供を受けている。

ソフィア・コワレフスカヤ賞の授与は、2018 年 11 月 22 日にベルリンで行われる正式な式典で行われる予定である。マスコミの招待も予定されている。

今回の受賞者（母国/最新の居住国、研究分野、受入機関）は下記の通り。

Aydan Bulut-Karslioglu（トルコ/米国、分子生物学、マックス・プランク分子遺伝学研究）

Kenji Fukushima（日本/米国、進化生物学、ユリウス・マクシミリアン大学ヴュルツブルク）

Milica Gašić（セルビア/英国、人工知能・画像・言語処理、ザールラント大学）

Hitoshi Omori（日本/日本、理論哲学、ルール大学ボーフム）

Paola Pinilla（コロンビア/米国、天体物理学、マックス・プランク天文学研究所）

Fritz Renner（ドイツ/英国、臨床心理学、フライブルク大学）

AvH:

<https://www.humboldt-foundation.de/web/press-release-2018-20.html>

（2018 年 8 月 30 日）

第18回ドイツ研究者国際ネットワーク（GAIN）総会、ボストン（米国）で開催 フンボルト財団（AvH）、ドイツ学術交流会（DAAD）、 ドイツ研究振興協会（DFG）共同でのプレスリリース

第18回 GAIN 総会では、460 名以上のポスドクおよび若手研究者が、ドイツの大学の学長、研究機関の所長、政治家と交流する。GAIN 総会は、学術拠点としてのドイツにおけるイノベーションや雇用をめぐる、9 月 7 日から 9 日にかけてボストンで開催される。

GAIN 総会では 3 日間、各国の研究者及びドイツ人研究者が、大学でのキャリア形成や、ビジネスへの転換、高等教育機関での教育活動、ビジネスマネジメントやスタートアップ企業設立の手ほどきなど、ドイツでの継続的なキャリアの展望に関して議論を交わす。テーマは、デュアルキャリアプランニングから、若手の研究グループにおけるリーダーシップやテニュアトラック制度まで、幅広い分野に及ぶ。タレントフェアでは、各研究機関が、キャリアパスや具体的な仕事を紹介する。各資金提供機関は、ドイツへの帰還プログラムや奨学金についての情報を提供する。ミュンヘン工科大学のロボティクス・メカトロニクス・ミュンヘンスクール（スタートアップ企業）の創始者で学校長でもある、ハグティン教授（Sami Haddadin、工学博士、2017 年ドイツ未来賞受賞者）が、基調講演を行う。スタートアップ・ピッチでは、6 つの研究チームが 2018 年 GAIN 賞をかけて競う。今回初めて授与されるこの賞には、学術のスピンオフに関するドイツの大学における 1 週間のコーチングやメンタリングが含まれている。

9 月 7 日午前、DAAD のヴィンターマンテル（Margret Wintermantel）会長、DFG のシュトロシュナイダー（Peter Strohschneider）理事長、AvH のパーペ（Hans-Christian Pape）会長、北米の研究者は、共同で挨拶を行った。ヴィンターマンテル会長は、学術における国際的なネットワークの意義を強調し、次のように述べている。

「ドイツの大学や、応用科学系の専門学校、その他の研究機関は、近年大幅に業績を伸ばしている。この成果に欠かさないのは、国際的なネットワークである。重要なのは、若手研究者が

世界中のトップ大学で経験を積み、能力を伸ばすことである。起業や技術革新のマーケティングなどといった学術分野以外でのキャリアに関しても、ドイツのトップ研究者は北米から多くを学ぶことができるだろう。」

DFG のシュトロシュナイダー理事長は次のように述べている。「現在多くの研究者がドイツに帰還している。このことは、ドイツにおいて学術が社会的にも政治的にも極めて高い支持を得ているということと無関係ではないだろう。学術への懐疑論が芽生えていた時代は、このような動向は当たり前なことではなかった。信頼なしには、いかなる学術の自由もない。好奇心に従って長期間活動することのできるこうした GAIN のような枠組みこそ、極めて優れた研究にとって不可欠である。」

GAIN について

ドイツ学術国際ネットワーク（GAIN）は、北米で活動するドイツ人研究者のためのネットワークである。2003 年以来、GAIN は複合的なプログラムによって北米で活動するドイツ人研究者とドイツ学術機関との連携をサポートしており、彼らがドイツの研究拠点へ帰還する準備を行うことや、政治的な意思決定機関に対してそれぞれの関心を表明することができるよう支援してきた。GAIN は AvH、DAAD、DFG による共同プロジェクトであり、連邦教育研究省（BMBF）から資金提供を受けている。フラウンホーファー協会、ヘルムホルツ協会、ライプニッツ協会、マックス・プランク研究所、ドイツ大学長会議（HRK）、ドイツ全国奨学金財団（Studienstiftung des deutschen Volkes）、ドイツ癌支援協会（Deutsche Krebshilfe）は、準会員である。さらに、学術、産業、政治分野からの協賛者が、定期的に GAIN の活動を支援している。第 18 回 GAIN 総会は、2018 年 9 月 7 日から 9 日まで、ボストンのマリオット・コープリー・プレイスで開催される。

DFG:

http://www.dfg.de/service/presse/pressemitteilungen/2018/pressemitteilung_nr_38/index.html

（2018 年 9 月 7 日）

アクセス

日本学術振興会ボン研究連絡センター

JSPS Bonn Office

Wissenschaftszentrum

Ahrstrasse 58, 53175 Bonn（事務所住所）

Postanschrift: 20 14 48, 53144 Bonn（郵便物用）

Tel. +49(0)228-375050

Fax +49(0)228-957777

www.jspis-bonn.de

